

多文化共生キャンパスの実現を目指した 「地域ゼミ」の振り返りと実践報告

Reflection and Practice Report on the “Regional Seminar” Aimed at Realizing a Multicultural Campus

山本 晋也

要旨

本稿では、日本語教育を専門とする筆者がこれまで9年間に渡って担当してきた「地域ゼミ」の実践を振り返り、活動内容の変遷とその背景について記述した。次に、その振り返りを踏まえ、2025年度に実施した多文化共生キャンパスの実現を目指した地域ゼミの実践について報告した。具体的な活動内容としては、在住外国人支援の一環としての地域日本語教室の現状と課題に注目し周南市や山口県の取り組みについて学ぶと共に、実際の教室見学を行った。また、それらの学びをもとに多文化共生キャンパスの実現へ向けた企画の立案・実施を行った。しかし、全15週のゼミにて複数の活動を取り入れたものの、いずれも一過的な学習に留まってしまったこと等が反省点であった。今後の課題は、ゼミ履修を契機とする学生の多文化共生への理解や関心を、継続的な取り組みへとつなげていくことである。

キーワード：多文化共生 地域日本語教室 在住外国人支援 日本語教育

1. はじめに

筆者の所属する周南公立大学（以下、本学）では、課題解決型学習（PBL；Project/Problem Based Learning）の入門編として、地域が抱える課題の発見・解決に取り組むことで課題対応能力の伸長を目指す「地域ゼミ¹⁾」という科目を設置している。同科目は学部・学科を横断する総合科目として位置づけられており、2025年度は計22名の教員による複数のゼミが開講されていた。

筆者は、2017年よりこの地域ゼミを担当しており、「日本語教育」という自身の専門分野を踏まえて、学内の留学生を中心に本学及び地域社会の多文化化に貢献することを目的として活動してきた。一方で、授業形態を含むゼミの内容に関しては、その時々留学生の状況や本学の環境に応じて、変更を繰り返してきた。本稿では、まず次章にて自身のこれまでの地域ゼミを振り返り、各時期において何を目標とし、誰と・どのような活動を行ってきたのか、その変遷について記述する。そして、第3章ではその振り返りを踏まえて、今年度の地域ゼミの活動について詳細な報告を行う。最後に、全体のまとめから今後の地域ゼミを進める上での課題について明らかにする。

2. 地域ゼミの概要

以下の表1は、筆者の担当する地域ゼミの授業形態と主な活動内容についてまとめたものである。

1) ゼミの内容は担当する教員によって様々であるが、各ゼミがそれぞれのテーマに応じて、また連携相手となる地域のニーズに応じて取り組むべき課題を見だし、まちづくり、ボランティア、イベント企画・開催、商品づくり、コンテンツ制作、情報発信など多様な課題解決活動を行う。ゼミの実施にあたっては、多様なゼミ活動に共通する課題解決プロセス（現状認識、問題発見、課題解決、結論・総括）を意識し、課題解決の方法論の習得を目指すと同時に、他者との協働を通じてEQ力の伸長を図ることが目指されている（2025年度シラバスより一部抜粋）。

表 1 筆者の担当する地域ゼミの変遷

年度	授業形態	主な活動内容
2017年度～ 2019年度	留学生対象 ／対面実施	・近隣小学校との交流授業の企画と実施
2020年度	留学生対象 ／オンライン実施	・オンライン日本語授業の体験
2021年度	日本人・留学生混合 ／オンライン実施	・留学生オンラインチューター ・小学校児童とのオンライン交流
2022年度	日本人・留学生混合 ／対面実施	・留学生チューター ・学内交流行事の企画
2023年度～ 2025年度	日本人・留学生混合 ／対面実施	・地域日本語教室の見学 ・多文化共生キャンパスの実現に向けた企画 の立案と実施

表1に示した通り、筆者の地域ゼミの活動内容は、①近隣の小学校児童との交流授業、②留学生（新入生）対象のチューター活動、③地域日本語教室の見学と多文化共生キャンパスの実現に向けた企画立案、と移り変わってきた。また、履修対象も開講当初は留学生に限定していたが、2021年度より日本人・留学生混合クラスへと変更することになった。以下、これらの背景について記述する。

2.1 近隣小学校との交流授業の企画と実施

筆者が地域ゼミを担当することになったきっかけは、かねて別の教員が本学近隣にある小学校と連携して行っていた地域ゼミを引き継いだことであった。そこで、4月のゼミ開始を前に小学校担当者との打ち合わせを行い、「異文化交流をテーマに、大学留学生と1～6年生の児童が各1回の交流を行う」ことを主なゼミの活動に据えることとなった。授業の流れとして、まず始めに大学側（留学生）が中心となって、全6回の交流授業の前に小学校担当者との打ち合わせを進めていった。そして、合議の上で交流授業の内容を決定し、授業や教材の準備を進めていった。また、授業実施後は担当者との振り返りを行い、次回の授業に向けた準備を進めていくというものである。

一連の活動を通じて、留学生においては1) 日常的な接点のない他者との交流を経験し、2) その相手や場にあった日本語を学ぶこと、の2点を目標としていた。更に、こうした日本語の学びに加えて、筆者が期待していたのは、交流に参加した児童・留学生はもちろん、交流授業に携わる小学校教職員や自治会の方を含めた全員の間に「同じ地域に暮らす市民としての意識」を育むことであった。

立部・山本(2015)でも報告している通り、このような学外連携のゼミ活動を設定したのは、様々な事情から学内において「周辺化²⁾(マージナライゼーション maizinaliza-tion)」(矢板2012, p.434)されがちな留学生の状況があったからである。本ゼミの狙いは、留学生がことばの主体となることを通じて、そうした状況の改善へとつなげていくことを期待するものであった。

詳細は割愛するが、上述した小学校との連携に基づく実践は、いくつかの課題を抱えながらも、それ以上に留学生・児童・小学校の三者それぞれに有意義な学びの実感をもたらす実践として、3年間継続することができた。しかし、2020年に入り、新型コロナウイルスの感染拡大によって対面での活動が制限され、大学の授業が全面的にオンラインとなる中で、やむを得ず地域ゼミもその在り方を見直すこととなった。

2.2 オンライン交流と留学生チューター活動

小学校とも前述の事情を共有し、急ぎオンラインでの交流活動を模索したが、やはり2020年は双方の状況が整わず交流の継続を断念することとなった。一方、本学においても新たに海外からの入学を予定していた留学生の来日が困難となっていた。筆者のゼミにおいては履修者が揃わなかったこともあり、この時期より授業形態を日本人学生・留学生の混合ゼミへと変更することとなった。

こうした状況のもと、2021年度の地域ゼミでは、主な活動として本学へ入

2) 「外国人子弟が日本の教育に関する場面において不利益を被る」(矢板2012, p.433) 構造的な状況を意味する

学したものの来日が叶わず母国にてオンライン通学をする留学生を対象に、オンラインチューター活動を行うこととした。その目的は、単に日本語の習熟や大学生生活への理解を深めるだけではなく、コミュニケーションを通じてゼミ履修者・新入生共に先の見えない現状への不安を少しでも和らげ、大学生活そのものの充実を図ることにあった。そこで、授業では、まず筆者から活動趣旨や具体的な交流手順などの説明を行った後に、ゼミ履修者間で2～3週にわたって「お互いを知り合う」ための活動を行った³⁾。そして、活動を踏まえて、ビデオ通話ツール（Microsoft teams）を利用したオンラインチューター活動を開始した。チューター活動は、日本人・留学生合わせて数名のゼミ履修者と新入留学生が、お互いの近況や興味のある話題を中心に、週1回1時間程度オンラインでのやり取りを行い、またゼミ内で活動の様子について報告する、というものである。回数・時間の限られた中での活動であったが、全15週の授業後に実施したアンケートでは、特に新入留学生から「不安が多い中で実際に日本にいる学生と話せたことは大きな励みになった」という声もあり、活動には一定の意義があったのではないかと思われる。

一方、前述した小学校とも折を見て交流の可能性を探っており、2021年度後期のゼミ⁴⁾では、オンラインチューター活動に加えてゼミ履修生と小学校児童とのオンライン交流を行うこととなった。双方の環境や活動時間などに制約はあったものの、事前にゼミ内でアイデアを募り、小学校とも打ち合わせを重ねた結果、「オンライン海外旅行体験」をテーマとして交流授業を行うことに決定した。交流当日は、大学を中継点として留学生チームと小学校のクラスをオンタイムでつなぎ、留学生が作成したスライドや動画を用いて母国の文化紹介やクイズ等を行った。時間の都合等もあり1学年のみの交流となったが、後日の振り返りにおいては留学生・児童の双方にとって有意義な経験となったこと、また、オンラインでの交流の可能性に期待する声上がる等、様々な収

3) 2021年度前期の時点で、本学では一部対面授業を再開しており、本ゼミも対面で実施した

4) これまで筆者の地域ゼミは前期（4月～7月）のみの開講であったが、2021～2022年度に限り前期に加え後期（10月～1月）も開講していた。

穫があった。

2.3 多文化共生キャンパスの実現を目指した活動へ

こうしてオンラインでの交流を重ねる中で迎えた2022年度であったが、小学校からはこれまでと同様に「留学生との異文化交流」を希望する一方で、大学としては日本人学生も含む混合ゼミでの新しい活動を模索しており、お互いの求める実践像に少しずつずれ違いが生じ始めていた。そのため、何度か打ち合わせを重ねたものの以降のゼミでは交流の実現に至らず、まずはチューター活動を継続して行うこととした。

一方、この頃には新型コロナウイルス感染拡大の収束とともに、これまで来日の叶わなかった留学生達も順次入国が認められる状況にあった。対面活動の制限も次第に少なくなっていく中で、週1回のチューター活動だけではなく、大学全体の国際化や多文化共生の促進を目指し、新たなゼミ活動として「学内での国際交流行事の企画・実施⁵⁾」を行うことを決めた。

特に、2022年度は大学公立化により学内の留学生比率にも大きな変化が生じており、以降のゼミ履修者はほぼ全員が日本人学生となっていた。また、新規入学者全体に占める留学生の割合が大幅に減少したこと、更に、入学する留学生の日本語レベルが全体的に向上したことを受け、チューター活動を必要とする状況がなくなっていったことも上記の決定に大きく影響していた。こうした背景から、2023年度以降の地域ゼミでは多文化共生キャンパスの実現を活動テーマに掲げ、日本人学生を主体として新たにゼミの方針を模索することとなったのである。

3. 2025年度地域ゼミ実践報告

前章では、2017年度より筆者の担当した地域ゼミの活動内容を振り返り、

5) 企画の立案と実施に当たっては、基本的に全て学生の主体的な進行に委ね、教員は教室手配や予算申請等の事務作業のみ行うようにした。

その変遷と背景について記述した。本章では、これまでの記述を踏まえて2025年度の地域ゼミの実践について報告する。

今年度の地域ゼミ⁶⁾は、「多文化共生キャンパスの実現」を目標に、①在住外国人支援を巡る地域の現状と課題への理解、②地域日本語教室の見学・参加、③多文化共生キャンパスの実現を目指した企画の立案と実施、の大きく3つの活動を行った。以下に示す表2は、全15週の授業の主な内容をまとめたものである。

表2 2025年度地域ゼミのスケジュール

日程とテーマ	教室活動の主な内容
第1～7週 在住外国人支援を巡る地域の現状と課題への理解 + 地域日本語教室の見学・参加	1週目：授業ガイダンス 2週目：在住外国人について知る・学ぶ 3週目：地域日本語教室について知る・学ぶ 4週目：日本語教師/学習者について知る・学ぶ 5週目：やさしい日本語について知る・学ぶ 6週目：まちの外国人について調べる 7週目：振り返りとレポート作成・発表
第8～13週 多文化共生キャンパスの実現を目指した企画の立案と実施	8週目：ゼミ企画の立案と準備 9週目：ゼミ企画の立案と準備 10週目：ゼミ企画の立案と準備 11週目：ゼミ企画① スポーツ交流（モルック） 12週目：ゼミ企画② ゲーム交流（ITO） 13週目：予備日
第14～15週 活動のまとめと振り返り	14週目：活動報告資料（ポスター）作成 15週目：活動報告資料（ポスター）作成

以下、次節では表2に示すテーマと活動内容について、詳細を記述する。そして、活動全体を振り返って、今後の地域ゼミの課題と展望について述べる。

6) 2025年度は2学部3学科から計15名の学生が履修していた（うち、留学生1名）。

3.1 在住外国人支援を巡る地域の現状と課題への理解

2.3で述べた通り、2022年の大学公立化以降、本ゼミの履修生はその大部分が日本人学生となった。しかし、履修する学生の多くが「多文化共生」や「国際交流」などのキーワードに興味を持って当ゼミを選択するものの、実際にそうした活動への参加経験は少なく、外国人との交流も未経験であることが多かった。そこで、まず始めに関連する話題への理解と関心を深めるべく、在住外国人支援を巡る地域の現状と課題をテーマに、毎週1つの話題を取り上げて講義形式での授業を行うこととした。2025年度のゼミでは、特に在住外国人支援の一環としての「地域日本語教室」に注目し、身近な周南市・山口県でどのような人や組織が地域の日本語教育に関わっているのかを話題として取り上げた。また、実際に外国人とのコミュニケーション場面を想定し、そのアプローチとしての「やさしい日本語」について紹介をした。最後に、これまでの学習の総括として、ゼミ生自身の出身地や関心のある市区町村を1つ選び、各市町の在住外国人支援の現状と課題についての調査・報告を行った。

3.2 地域日本語教室の見学・参加

3.1の講義形式の授業と並行して、身近な在住外国人支援の取り組みについて直接その現場を体験するべく、周南市で開設される地域日本語教室への見学を行った。見学に際しては、「日本語クラブしゅうなん⁷⁾」に協力を依頼し、毎週木曜夜に開講される「外国人のための日本語教室」、隔週で土曜日に開講される「こどもにほんごクラブ」、隔週で日曜日に開講される「日本語でおしゃべり+さくら会」の計3教室にて、ゼミ生に授業見学の機会を頂いた。

見学までの流れとしては、始めに10月～11月の2か月間で上記3クラスの開講に合わせて参加者を調整し、各回で最大4名程度が見学に向かうよう調整を行った。ゼミ生には3教室のいずれかで一人2回以上の見学を義務付け、クラスのある日に各自で見学を行うよう指示した。なお、見学後は、簡単な振り返りのレポート作成・提出を義務付け、そのフィードバックをゼミ内で行っ

7) 周南市ホームページより <https://www.city.shunan.lg.jp/soshiki/17/97587.html>

た。レポート及び口頭でのフォードバックでは、多くの学生が「周南・山口でこうした取り組みが行われていることを初めて知った」と驚きを述べ、外国人とのコミュニケーションの楽しさや日本語教育の難しさ、また、日本で暮らす彼／彼女ら自身への関心を報告していた。これらレポートについては一定期間ごとに取りまとめ、ご協力いただいた地域日本語教室の担当者にも共有した。

3.3 多文化共生キャンパスの実現を目指した企画の立案と実施

ゼミの折り返しとなる8週目からは、講義や教室見学を通じて得た学びを踏まえて、「多文化共生キャンパス」の実現を目指し、ゼミ生らによる自主企画の立案・実施へと移った。まず始めに、自分たちにとっての目指すべき多文化共生キャンパスとは何か、そのためにどのような取り組みが必要かを話し合った。そして、その実現に向けて何ができるのかを検討した。その結果、全15名のゼミ生が7～8名の2グループに分かれ、①スポーツ交流（モルック）、②ゲーム交流（ITO⁸⁾）の2点を行うこととなった。

今回の企画意図は、留学生を含む多様な学生の参加と交流を促し、スポーツやゲームを通じた他者理解の機会を設けることで多文化共生キャンパスの実現に向けた第一歩となることを目指したものである。事前準備として、当日の進行や物品の準備を分担して行ったほか、広報活動として Microsoft teams・C-learning を通じて参加者募集の告知を行った。しかし、必修科目を含む複数の講義が重なる時間帯（地域ゼミ講義時間内）の開催であったため、当日は1・2年生を中心に若干名の参加者を迎えるに留まった。

3.4 活動のまとめと振り返り

例年、地域ゼミでは大学内外への活動報告を行うべく、年度末にポスター形式・動画形式で報告資料を作成することになっている。本稿執筆時点（2025

8) アークライト社の提供するカードゲーム。あるテーマについて自身の手札の数字が1（低）～100（高）のどこに位置づけられるかを想像し、それを表す名称を言葉で表現する。<https://arclightgames.jp/product/ito/>

年12月)では、ゼミ履修者にその告知のみを行った段階であるが、今回も例年通りに活動報告としてポスターを作成する予定である。また、授業としての成績評価の一部として、7週目・13週目終了時点でそれぞれ振り返りの小レポートを課しているほか、学期末にはゼミ活動全体を振り返ってのレポート作成を課題として指示している。

4. 今後の課題

本稿では、まず始めに2017年より筆者が担当する地域ゼミの活動を振り返り、その変遷と背景について記述した。そして、振り返りを踏まえて、現在実施している2025年度の地域ゼミについて活動報告を行った。

多文化共生をテーマに、地域日本語教室の見学や講義形式での学習を行うスタイルは2023年度より開始したものであるが、現時点での課題として挙げられるのは、①3つの活動がいずれも継続的な取り組みになりにくいこと、②地域日本語教室を巡る前半の内容と後半の学生企画の結びつきが見いだしづらいこと、の2点である。その要因としては、筆者自身の教室運営能力の問題もあるが、「多文化共生」というテーマに対して多くの活動や話題を盛り込むあまり、いずれにも理解や関心を深め切れない点にあるのではないかと考えられる。特に、2025年度は地域日本語教室の見学箇所を増やし、また、回数も2回以上にする等の工夫をしたが、教室代表者からは見学中の態度やゼミ終了後の参加者が皆無であることに対して、厳しい指摘を頂くこともあった。筆者の希望として、本ゼミが多文化共生を巡る地域社会への関心のきっかけになることを期待しているが、そのためには多くの課題が残されている。次年度以降の実践の取り組みにおいては、今年度の気づきをもとに改めて検討したい。

参考文献

- 周南市 (2025)「周南の日本語教室 (The Japanese Language Class in Shunan)」(2025年4月1日更新) <https://www.city.shunan.lg.jp/soshiki/17/97587.html>
- 立部文崇・山本晋也 (2015)「留学生による小学校児童への絵本の読み聞かせから考える地域

とのつながりー2014年度「地域ゼミ」の振り返りを通じてー『徳山大学総合研究所紀要』
37, 81-95

矢板晋 (2012) 「外国人の周辺化と日本語教育：栃木県真岡市の事例から」『研究論集』12, 北海道大学大学院文学研究科, 433-455